

# 久生十蘭作品の研究——〈霧〉と〈二重性〉のモチーフを中心に

開 信介

## 要約

本論は小説家久生十蘭（1902-1957）の小説技巧およびその作品構造についての研究である。十蘭は「小説の魔術師」と称され、その作品は多様な文体、巧緻な構成といった小説技巧の面で高く評価されてきた。その具体的な内実については本格的全集が長年未刊行だったこともあり、曖昧な点が多かったが、近年ようやく『定本久生十蘭全集』全12巻（国書刊行会、平20・10～平25・2）が刊行されたことにより、研究基盤が整うこととなった。

本論はこのような現状を踏まえ、十蘭作品に頻出するモチーフを切り口として、その小説技巧と作品構造を明らかにしようとするものである。具体的には、文体に密着したモチーフとしての〈霧〉と、プロット等の作品構造に密着した〈二重性〉という二つの主要モチーフの面から、上記全集未収録の新資料を含む十蘭の創作全268作品を網羅的に調査・分析し、そこで得られた知見をもとに作品分析を行う。作品分析に際しては、十蘭のブッキッシュな側面を捉えるために材源や先行作品の影響について、同時代に敏感な側面を捉えるために同時代的事象の作品への摂取の様相について、さらに十蘭の評価を高からしめた第二回世界短編小説コンクールの一等受賞をめぐる翻訳の問題などについてもあわせて考察し、十蘭作品の総合的分析を目指す。

第一章では〈霧〉モチーフについて考察する。まず十蘭作品群における雲霧あるいはそれに類した靄・霞・煙の描写を抽出し、それらのうち作品内で前後の脈絡との関連において何らかの規則性を伴い、かつ一定の質量を伴うものを〈霧〉モチーフと定義する。以上の定義にもとづく調査結果は、全268作品中、雲霧等の描写を一例以上含むものが163作品、〈霧〉モチーフを一例以上含むものが110作品である。この〈霧〉モチーフはさらに、それぞれの機能ごとに四つの型に分類できる。すなわち、物語の始まり、節目、終わりを示す①指標の〈霧〉、作品内における何らかの「事件」の直接的契機となる②契機の〈霧〉、「事件」の予兆として、あるいは「事件」それ自体の暗示となる③暗示・予兆の〈霧〉、何らかの「非日常空間」に付随する④非日常の〈霧〉の四タイプであり、それぞれの型について作例を示しつつ例証する。さらに〈霧〉モチーフの典型的作例として「氷の園」（『夕

刊新大阪』昭 24・10・13～昭 25・5・9) を分析し、同モチーフの用法をより具体的に考察する。最後に〈霧〉モチーフの成立背景を日本文学における伝統的修辞法や作家の個人的体験、あるいは先行作品の影響のなかに探り、とくにエドモン・ロスタンの戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』第三幕「ロクサーヌ接吻の場」の重要性を指摘する。

第二章では〈二重性〉モチーフについて考察する。まず作中人物同士の入れ替わりや取り換え、または夢と現実の混淆など、何らかの意味で対象が二重化する／されるモチーフを〈二重性〉モチーフとして定義し調査を行う。調査結果は全 268 作品のうち、何らかの〈二重性〉モチーフを一例以上含むものが 126 作品である。これを、Ⅰ「作為による〈二重性〉」、Ⅱ「無作為・偶然による〈二重性〉」、Ⅲ「夢・狂気・超自然力による〈二重性〉」、Ⅳ「所属・空間構造による〈二重性〉」の四範疇に振り分け、その上で〈二重性〉が生じる対象（「人」、「人ではないもの」、「時空」）を要として各範疇内に細目を設けて分類する。分類は以下のようなものである。Ⅰ－（①入れ替わり・入れ替え、②変装・偽装、③人ではないものへの変装・偽装、④演技、⑤人ではないものを演じる、⑥死を装う、⑦狂気を装う、⑧すり替え・偽装、⑨見立て、⑩時空の意図的な取り換え、⑪催眠術による時空の取り換え）、Ⅱ－（①取り換え、②属性の取り換え、③人ではないものとの取り換え、④生死を取り換える、⑤ものの取り換え、⑥時空の取り換え）、Ⅲ－（①狂気による人の取り換え、②狂気による属性の取り換え、③変身、④憑依、⑤狂気によるものの取り換え、⑥狂気による時空の取り換え、⑦夢と現実の取り換え、⑧超自然の顕現）、Ⅳ－（①所属の〈二重性〉、②空間構造の〈二重性〉）。分類ごとの作例数にもとづいて考察を行い、主として十蘭作品における幻想ならびに偶然的要素の副次性やその理知的傾向を指摘する。次に〈二重性〉モチーフの成立背景、とくに同モチーフのなかでも作例数の多さが顕著な入れ替わり・変装・偽装モチーフの背景について考察する。ここでは主として、十蘭が作家としての最初期に経たマッコルラン *La Tradition de Minuit* (1930) の翻案体験、さらにサヂイ「ジゴマ」（『新青年』昭 12・4）、スーヴェストル、アラン「ファントマ第一」（『新青年』昭 12・6）、ルルウ「ルレタビーユ第一」（『新青年』昭 12・7）、「ファントマ第二」（『新青年』昭 12・8）、「ルレタビーユ第二」（『新青年』昭 12・9）といった、いずれも入れ替わり・変装・偽装が頻出する作品の翻訳体験の重要性を指摘する。最後に〈二重性〉モチーフの諸相について作品を通じた把握を試みる。まず「魔都」（『新青年』昭 12・10～昭 13・10）における〈二重性〉モチーフ間の関係に着目し、「魔都「東京」」の空間構造の〈二重性〉が、入れ替わり・取り換え・偽装・変装といった幾

重もの探偵小説的〈二重性〉を産み出していることを論じる。次に「雲の小径」（『別冊小説新潮』昭 31・1）における〈霧〉モチーフと〈二重性〉モチーフの関係に着目する。

〈霧〉モチーフを構成する雲・霧・靄・霞が本来的に水と空気の中間的状態である点、煙が物質と空気の中間的状態である点、さらに〈霧〉モチーフと〈二重性〉モチーフの不定形な流動性という共通点に注意を促し、両モチーフのイメージ的通底性を指摘する。その上で「雲の小径」における両モチーフの有機的融合を指摘する。

第三章では「鶴鍋」（『オール読物』昭 22・7。のち「西林図」と改題）について、同時代的事象の摂取と〈二重性〉モチーフの一つである「見立て」を軸として考察する。同時代的事象の摂取については、まず本作の重要な要素である空襲と失踪に着目し、作中で言及される空襲が横浜大空襲（昭 20・5・29）を指していること、空襲と失踪の結びつきという戦争の現実の作中への摂取、作中の時間軸が昭和 21 年秋頃に設定されていることなどを指摘する。その上で、作中における失踪の扱われ方と実際の民法上の失踪の取り扱い方を照合し、本作において「家」のドラマが強調されていること、昭和 21 年秋頃という時間設定の重要性と、この時期が日本国憲法施行（昭 22・5・3 施行）による家制度の法的解体直前にあたることを指摘する。さらに、家制度の廃止を目前にした世論の葛藤を新聞の世論調査に確認し、その葛藤が孫娘の結婚をめぐる作中人物の矛盾した態度に反映されていることを指摘する。最後に作品の精読を通じて家制度の解体がもたらす作中人物たちの感情の陰翳を読み解く。次に本作における〈二重性〉モチーフである「見立て」について、主として作品構造との関わりや素材という点から論じる。構造との関わりについては、本作には作中人物が俳人であるなど俳諧的要素が目立ち、見立てがその結節点となっていること、鶴に見立てられ、さらに死者に見立てられる作中人物（鶴—滋子—死者）、丹頂に見立てられる真鶴（丹頂—真鶴）など、見立ての連鎖が物語の流れを生み出していること、さらに主要な舞台となる鹿島邸の庭園そのものが「倪雲林の「西林図）」と二重写しの、作品に横溢する見立てのイメージが包含・収斂するにふさわしいダブルイメージの空間であることを指摘し、このような「見立て」モチーフの連関的構造が本作に様式的美観を与えていると論じる。素材については、まず核となっている鶴—滋子—死者の見立てが、馬琴『八犬伝』と長唄所作事「鶯娘」を触媒として得られた自作「新版八犬伝」（『新青年』昭 13・4）の一場面をさらなる触媒として創造されたことを論証する。その上で「新版八犬伝」では「白鷺」であったものを本作ではなぜ「鶴」、就中「真鶴」に置き換えたのかについて考察する。「鶴」への置き換えについては、本作の大団円にふさわしい縁起の良

さ、および本作と構想において重複する自作の掌篇「水草」（『宝石』昭和 22・1）の影響を指摘する。ここでは料理としての「鶴鍋」についても考察する。さらにツルのなかでもなぜ「真鶴」が選ばれたのかへと考察を進め、本作でも本論第二章で指摘した〈霧〉モチーフと〈二重性〉モチーフの融合が現われることを確認した上で、「真鶴」の登場はそのような融合の変奏であり、本作に見立て「丹頂の鶴」として「真鶴」が登場するのは、一方で吉兆としての鶴のイメージを強く打ち出しながら、また一方では「見立て」という〈二重性〉モチーフが頻出する作品様式にイメージにおいて通底する鶴を登場させるためであったと論じる。丹頂－真鶴の見立ての素材についても論じ、これが平凡社『大百科事典』から得た崔豹撰「古今註」の「鶴千歳化為蒼又千歳變為黒所謂玄鶴是也」という記述にもとづくことなどを論じる。最後に本作は戦争・敗戦にまつわる同時代的事象と俳諧の見立てを縦糸横糸にとって織られた一篇であり、このような本作の枠組が暗示的にテキスト冒頭に織り込まれていることを指摘する。

第四章では「予言」（『苦楽』昭 22・8）について、その語りの構造と〈二重性〉モチーフとの関わりを中心に論じる。本作は従来からその特徴的な語りに注目が集まってきた作品であり、まずジェラルド・ジュネットによるナラトロジーの知見を用いてテキスト分析を行い、語りの特徴や機能を明らかにする。本作の語りの第一の特徴として指摘できるのは、等質物語世界的な語り手であるはずの語り手が、その焦点化における制約を各所で踏み越えることである。ただし、このような焦点化については最終的に原理的な正当化がなされるため、第一の特徴はあくまで物語行為の過程においてのみ成立する。換言すると、第一の特徴は原理的な正当化が最後まで迂回されるために成立する。第二の特徴は、作中人物としての語り手の曖昧化である。第三の特徴は、伝聞にもとづいた箇所を含む回想としてしか原理的には正当化しえない語りであるにもかかわらず、回想であることを最後まで隠蔽しようとすることである。第二・第三の特徴は、焦点化上の制約違反である第一の特徴を物語行為の過程において際立たせないように働いている。これらの特徴の志向するところは、異質物語世界的物語言説に擬態した等質物語世界的物語言説として語る、と要約できる。前述のように第一の特徴が生じるのは語りの正当化が最後まで迂回されるためであるから、この迂回がなされなければ第一の特徴は成立せず、したがって第二・第三の特徴も不要であったことになる。換言すれば、語りの正当化の迂回がなされるのは、これらの特徴がもたらす前述の擬態性が語りにおいて必要であったからである。次にその必要が具体的にいかなるものであるのか、本作の幻覚小説（夢オチ小説）としての特徴を中心

に検討する。幻覚小説の本質は、物語内容＝現実という読者の信憑を、物語内容＝幻覚であったと最後に覆し、驚きを誘うところにある。しかし、幻覚小説が幻覚小説たりえるためには、単に現実から幻覚への移行を隠蔽するだけでは十分でない。それには物語内容＝幻覚という可能性について読者へ目配せを送った上で、さらに読者に物語内容＝現実という信憑を抱かせるという二重の操作が必要となることを指摘する。本作における読者への目配せについて確認し、本作がどのように物語内容＝現実という信憑を読者に引き続き保たせようとしているのか考察する。ここで指摘するのは出来事の連続性を装うことと時間の連続性の明示である。以上のような本作の幻覚小説としてのたぐらみと前述の語りの特徴の関わりについて検討し、関連性を見出せないことを指摘する。さらに幻覚小説において要請される焦点化の制約と本作の語りの特徴との関わりについて考察する。幻覚小説では、焦点人物を設定する場合、幻覚体験者のみを焦点人物として語る部分が必須であり、かつそのような語りが大部を占めていることが望ましいと指摘する。これが幻覚小説の中核となる。その上で、この中核部分の態の選択肢として、①等質物語世界的物語言説であれば、幻覚体験者＝固定された焦点人物＝語り手、②異質物語世界的物語言説であれば、幻覚体験者＝固定された焦点人物＝三人称で指示される作中人物という図式を提示し、本作では①を選びがたく、②が自然な選択肢となることを論証する。以上を踏まえ、本作の語りの特徴が等質／異質物語世界的物語言説の双方の利点を取り込もうとした折衷案であるのかについて検証し、その可能性が低いことを指摘する。ここで問題をより広い視点から眺め直し、〈二重性〉モチーフという視点を導入する。本論第二章で論じたように、十蘭作品では一作品のなかに現われる複数の〈二重性〉モチーフが互いに有機的に結びついている場合がある。前述したように本作の語りの特徴を異質物語世界的物語言説に擬態する等質物語世界的物語言説と要約しうるならば、この語りはその擬態性という点から〈二重性〉モチーフの変種として考えうる。そしてこれが、幻覚小説という文脈からすでに論じた〈二重性〉モチーフの一つ「催眠術による時空の取り違え」と対応することを指摘し、本作の特徴的な語りは〈二重性〉モチーフ間の対応関係を構築するための選択だったのでないかと論じる。さらに、このように重層する〈二重性〉モチーフは、本作にも確認できる〈霧〉モチーフと照応関係にあることを指摘する。最後に、事物の実在性を把握しようとするのが結果的に虚構による死につながるという本作の主題を指摘した上で、そこに埋め込まれた二重化された構造についても指摘する。

第五章では「母子像」（『読売新聞』朝刊、昭 29・3・26～28）について、本作の〈二

重性)モチーフと第二回世界短編小説コンクール一等受賞における翻訳の問題を中心に考察する。まず〈二重性)モチーフについては、本作において用いられている同モチーフを四点にわたって指摘する。さらに、本作は全体の構造自体もまた二重化されていることを指摘する。以上を踏まえ、本作では作品全体の二重構造と照応するように各所に〈二重性)モチーフが鑿められていると見ることができ、このような構成法、すなわち〈二重性)の入れ子構造は、すでに本論第二～四章でも指摘したものであり、本作もまた十蘭の作品構成法のひとつの典型を示す作品であると論じる。次に、本作が一等を受賞した *New York Herald Tribune* 紙主催第二回 (1953 - 1954 年度) 世界短編小説コンクールにおける翻訳の問題について考察する。本作の評価とその受賞歴が深く関わっていることを確認した上で、その授賞過程における問題提起について確認する。先行研究によるその問題提起とは、本作の日本語原文と選考対象となった英訳テキスト間にはかなりの異同があり、これは政治的影響によるものではないかというものである。ここで示唆されている政治的影響がマッカーシズムであることを確認し、第二回同コンクール応募作品の多くを収録した *World Prize Stories ;Second Series* (Odhams Press Limited, London, 1956) [以下「*WPS II*」と表記] の序文から、マッカーシズムが第二回同コンクールの作品募集過程に明らかに影響を及ぼしたことを確認する。しかしマッカーシズムの影響が応募作品の改変にいたるほど重度であったのかについては疑問が残ることを指摘し、影響の程度および問題提起されている日英テキスト間の異同の原因について考察する。まず第一回および第二回世界短編小説コンクールについて、その成り立ちや目的等を確認する。ここでは、*New York Herald Tribune* (1950, April 16) 掲載のコラム “*On the Books On an Author*” に、第一回同コンクールの主催者が *New York Herald Tribune European Edition* (*Paris Herald Tribune*) であると明確に述べられていることも報告する。従来、本作が一等を受賞した第二回同コンクールの主催者は *New York Herald Tribune* 紙であると考えられてきた。しかし第一回的主催者が *New York Herald Tribune European Edition* であったことは、第二回的主催者も同様であった可能性を示唆している。次に本作の日本語原文と英訳テキスト間に存在する異同について、書誌を確認した上でテキストに即した具体的な分析を行う。英訳テキストの書誌では函館市文学館所蔵のタイプ原稿版についても報告する。先行研究が指摘する本作日英テキスト間の異同について、日本語原文テキストと *WPS II* 収録の英訳テキストを比較分析し、それがマッカーシズムの影響によるものとは言いがたいと結論づける。そこで新たに、異同が翻訳者吉田健一の訳出上の方法論によるものではないかという仮説を立て、吉田の翻訳観

について当時の発言から確認する。吉田は、翻訳とは本来、原文を「思想的な要素に完全に分解」し再構築することであり、この手続きこそが翻訳を「創作に近い」営為とすると考えていた。しかし同時に吉田は、出版の実情がこれを許さないと自らの苦衷を述べており、その場合、翻訳者が取りうる方法論は「何を、どういふことを切り捨てるか」、「原文の内容をなるべく簡明な言葉で伝えることを目指す」こと、つまり原文の省略・簡略化である、と述べている。吉田が、第二回同コンクール応募へ向けて日本作品の英訳を依頼されたのは、昭和28年の春から夏にかけての短期間と推測される。また、同年に出版された吉田による翻訳書は、確認できるだけでも8冊あり、吉田が応募作品を訳出する上で取りえた訳出上の方法論は、原文の省略・簡略化であったと想定することができる。これは本作日英テキスト間の異同を比較分析した際に判明した特徴と一致する。さらに第二回同コンクールに応募した他の日本作品（石川達三「二十八歳の魔女」『新潮』昭30・8、永井龍男「小美術館で」『新潮』昭30・8）原文をそれぞれWPS II収録の英訳テキストと比較分析し、同様に原文の省略・簡略化という傾向が見られることを確認する。以上を踏まえ、本作日英テキスト間の異同は、翻訳者吉田健一の訳出上の方法論によるものであり、このことおよびマッカーシズムにとってタブーであるべき原文の記述が省略されずに英訳されていることから、第二回世界短編小説コンクールにおけるマッカーシズムの影響は限定的であり、個々の作品内容の検閲にまで及ぶものではなかったと結論づける。

最後に本論の考察の概括を通じ、十蘭の小説技巧、作品構成法の根幹にある点綴性、コラージュ性を指摘し、「単純ないくつかのマニエールに独創的な組合せをあたへることによつて」「効果をひきだす」（「新西遊記」『別冊文芸春秋』昭25・12）という一節に、十蘭の創作の方法論の表白を見出す。